



大阪市立大学附属植物園のメタセコイア林

生きた化石 メタセコイア

大学の知を発掘!

019

メタセコイアはスギ科の針葉樹(裸子植物)で、中生代白亜紀の中頃(約9000万年前)までには出現した。メタセコイア(*Metasequoia*)という属名(注)は、三木茂

博士(後に大阪市立大学教授・理学部附属植物園園長)が、ノルウェーのスピッツベルゲン島から報告された新生代新第三紀中新世(約2300-530万年前)の化石種に基づき、1941年に命名した。この化石種はそれまで、北米に現生するセコイア属の種だと考えられてきたが、球果の鱗片や葉が対生に付く点で、セコイア属とは明確に区別できた。そのため、三木博士はこの化石種をメタセコイア属の種とした。同時に三木博士は、日本の新生代の地層からもメタセコイアの化石を報告した。その時点では、メタセコイアは化石以外では知られていなかった。

その後、1948年に中国湖北省から現生するメタセコイアが報告された。化石でしか知られていなかった植物が現存していたことから、この発見は「生きた化石」の発見として大いに耳目を集めた。三木博士は、現生のメタセコイアを調査したチェイニー博士(R.W.Chaney アメリカ・カリフォルニア大学)から苗木を譲り受け、そのう

ちの1本を理学部附属植物園(現 大阪市立大学附属植物園)に植えた。また、本学に事務局が置かれたメタセコイア保存会は、メタセコイアの苗木を増やし、市民に向けた販売も行った。その結果、日本中にメタセコイアが普及していった。このような経緯から、メタセコイアは本学を象徴する植物となった。

前述の通り、かつては日本にもメタセコイアが生育したが、約100万年前頃までに日本から絶滅した。日本では、メタセコイアの化石はスイショウ(スギ科)の化石と一緒に見つかることが多く、それらは川や湖の近くに生育していたらしい。附属植物園では、メタセコイアとスイショウやヌマスギ(ヒノキ科)を小さな池の周りに植栽しているが、これは“日本から失われた水辺の風景”を復元したものである。なお、チェイニー博士から譲り受けた苗木は今でも附属植物園で大きく育っている。

(附属植物園 山田敏弘)

注: 生物の学名は、属名と種名の組み合わせで表される。例えば、現生のメタセコイアの学名は *Metasequoia glyptostroboides* であるが、これは *Metasequoia* という属名と、*glyptostroboides* という種を示す形容語とを組み合わせたものである。



140周年展と大学史資料館(大学博物館)
実現にむけてご寄附のお願い → 大阪市立大学夢基金
お申込み時に TOP1「創立140周年記念事業」を選択してください
【お問い合わせ】大学サポーター交流室(夢基金担当) TEL06-6605-3415
<https://www.osaka-cu.ac.jp/ja/about/fund/xbtf2s>

編集発行
(仮称) 大学史資料館設立準備委員会
学術情報総合センター6階 大学史資料室内
TEL: 06-6605-3261



旧予科を望む

何んだいこれは？ 校舎の前はこんなヤケな建物を建ててさ、これなら芝生も何もないじゃないか！ それにこの予科の方は花でも灯もつかないし電も無いことか？ と言うよ、多分使ってないんだろ。それならそれでサッパリ返しやいのになさ、それとももともと兵隊を寄すつもりなのかな？ 大変なことさ。



右：キャンパスサカイの検問所（1954年ごろ）
 左上：『大阪市大 杉本町校舎等の実態写真集』（学生が陳情用に作成）
 左下：2号館に残る米軍の痕跡（左：THE INFANTRY〔歩兵〕 右：部隊章）

10年におよぶ杉本町校舎の接収と返還運動

大阪市立大学杉本町校舎は、戦後約10年間にわたり、占領軍に接収されていたという歴史を持つ。このような長期の接収は他にほとんど例を見ず、当時の大学構成員はもとより、周辺住民や大阪市の苦悩はひとかたならぬものであった。

1945年10月、進駐軍から校舎の明け渡しを急ぎよ要求されたことから、杉本町に位置する大阪商科大学の学部・予科・図書館・研究室などは、市内の国民学校等に分散しての移転を余儀なくされた。翌月に授業は再開されたが、施設的には極めて不十分かつ不便を強いられ、教育や研究、学生生活などにも多大な影響を及ぼした。いっぽう1947年なかごろから新制大学の構想が立ち上がり、商科大学に加え、本学理学部・工学部の源流である都島工業専門学校、生活科学部の源流である大阪市立女子専門学校も合流し、1949年4月に大阪市立大学が商・経・法文・理工・家政の5学部を擁して発足した。しかし、校舎は分散したままで、「タコ足大学」「ジブシー大学」などと自嘲し、揶揄されるようなありさまであった。

こうしたなか、「校舎返還運動」は1950年ごろから、商大や市大の学生たちを中心に開始されたようである。

ところが、同年6月に朝鮮戦争が勃発すると、杉本町校舎は軍事病院に転用され、傷病兵の収容・治療施設、戦死兵の本国送還のための中継地として機能したことから、返還は遠のかざるを得なかった。

その後、返還運動は活気を取り戻し、学生たちは文部省訪問や文部大臣との会見、学生大会の開催、署名活動、基地司令官との会見などを精力的に行った。大学や市当局あるいは同窓会なども、陳情や要請を繰り返した。

1952年8月、努力が実り、校舎の一部接収解除と返還が実現したが、大学と軍施設が金網を挟んで併存する状態となったため、さらに全面返還に向けた運動が展開することとなった。1954年には病院にかわり米海兵隊が移駐したことなどから、危機感を募らせた市大学生や教職員たちはいっそう粘り強い運動を続けた結果、1955年9月に全面返還が実現し、10年にもおよぶ長い接収と運動はようやく終りを告げた。

現在でも、よく探してみると、キャンパスのなかに接収期の痕跡をいくつか見出すことができる。

（法学研究科 安竹貴彦）



準備室だより

◆140周年記念展示室が2020年11月3日に開室しました。新型コロナウイルス感染症の影響で、一般公開は未定です。今後の開室予定は、大阪市立大学ホームページでお知らせします。◆大学ホームページの創立140周年記念特設サイトに、【大学史資料館の設立をめざして】が公開されています。大学史資料館の準備状況と140周年展の報告や、『NEWS LETTER』などを順次掲載していきます。ぜひご覧ください。◆この『NEWS LETTER』は、大阪市立大学 学術情報総合センター ホームページの学術機関リポジトリでも公開しています。「大学史資料館」で検索してください。

(仮称)「大学史資料館」設立 準備委員会からのお願い

現在、学内にある資料の所蔵調査を行なっています。学術資料そのもの、研究の過程で残された資料類、実験装置や器具類、実習に用いられた教材や作品などを、大学史にかかわる資料とともに探しています。候補となる資料がありましたらご一報ください。

→学術情報総合センター6階 大学史資料室内 TEL：06-6605-3261